日本における初期須恵器生産の開始と展開

植　野　浩　三*

Commencement and Development of Early Sue-ware's Production in Japan

Koso Ueno

はじめに

須恵器の生産技術は、古墳時代の中期、朝鮮半島から新たにもたらされたものである。この技術は、いち早く近畿と北部九州で開花し、生産を開始している。それは、日本における窯業史の起点といえる。

こうした初期を含めた須恵器生産の研究は、1960年代以降の陶邑古窯址群（以下、陶邑窯という）の本格的な調査によって得られ、初期の一群の須恵器の把握が可能になったことによっても、より活発になっていった[1]。もちろんそれ以前にも、森浩一氏の「和泉河内窯」の須恵器の編年や[2]、横山浩一氏の古墳出土資料を用いた須恵器の編年研究等のすぐれた業績が多くあり[3]、陶邑窯を中心とした須恵器編年を組み立てる上で、基礎的な資料になっていたことも認めねばならない。

陶邑窯の調査・研究では、編年研究の部分がクローズアップされがちである。もちろん型式学的に整理して、その序列を大別することによって画期を設け、須恵器を全体的に見通した業績は高く評価されなければならない[4]。さらに、こうした成果に裏付けされて、全国的な生産の開始と供給のありかたの考察や、政治的・社会的な諸関係の考察が可能になり、古墳時代を組み立てる上で重要な視点を示したことも忘れてはならない[5]。

初期須恵器と地方窯成立の解釈も、その重要な部分を占めていた。すなわち、地方窯が成立するまでの間は、須恵器は陶邑窯とその周辺から一元的に供給されていた、とする見解である。そして、それらの須恵器は政治的なルートにのって供給されたとする、古墳時代の社会的な構図を示すに至った[6]。

その後、地方窯の成立に関する認識は、大きく変化していった。初期須恵器の段階の窯跡が相次いで発見されていき、一元的供給の解釈と初期須恵器の名称においても矛盾が生じた。いわゆる「多元論」の提唱である。この「多元論」は、論旨の不明瞭な部分が多いため、筆者は二度にわたって整理し、問題点の指摘を行った[7]。ここでは特に、問題点の指摘の他、系譜論の反論として陶邑窯の資料を並列し、陶邑窯との共通性の指摘と再認識を行い、再検討の必要性を強調することに力を注いだため、日本全体としての、須恵器生産の開始と、展開については述べることは出来なかった。

平成4年9月30日受理　*考古学研究室

初期須恵器窯は、今後なお多数発見されることが予想できる。こうした段階で、日本における生産の全体像を描くには、大いに危険が伴う。しかし、すでに16箇所以上にものぼる窯跡が確認されており、具体的な整理をする時期にきている。単に初期須恵器窯の多さを騒いで、不明瞭な「多元論」の枠のままで温存することは許されない。系譜はいくつかに別れて成立したとしても、その展開を捉え、古墳時代の中に位置づける必要があろう。

したがって、小稿ではそうした視点に立ち、日本における初期須恵器生産の展開について考えていきたい。なお、初期須恵器の定義については、筆者は前に論じたことがあり、ここでは触れない。前稿を参照いただきたい[8]。

Ⅰ．近年の研究動向

上述した「多元論」の内容については、前述の拙稿に詳しいので触れないが、ほとんどの場合が詳細な検討に乏しいといえる。

この「多元論」の提唱者とされる橋口達也氏も、その後の論稿に大きな変化はない。「伽耶地域から北部九州・畿内などを中心として各地に陶質土器が導入され、陶工工人の渡来も行われて初期須恵器の生産が多元的に開始された」としている。そして、当初より中央政権の掌握下にあった陶邑窯は、須恵器生産の中心的な地位をもち、「Ⅰ型式２～３段階」の頃には各地の須恵器窯を掌握して、中央権力による組織化が行われた、とする見解を示している。特に北部九州の資料を中心に考察した展開であり、陶邑窯との詳細な検討に欠けるが、初期須恵器生産の展開を見通している点で評価されよう[9]。

西日本の初期須恵器の生産と流通については、小田富士雄氏の報告がある。小田氏は生産遺跡の資料を掲示して、その消費地（供給先）の範囲を求めている。須恵器生産の展開については、詳細に述べていないが、須恵器の定型化を境にして、５世紀代をＩＡ・ＩＢ期で区別し、０期を陶質土器の伝来期にし、窯跡・消費地資料を当該期に当てはめながら概観している[10]。

一方、藤原学氏は、吹田32号窯跡の調査を契機として須恵器窯の成立ルートと経緯について考えた。それは、須恵器窯を西方から、香川県三郎池西岸窯跡⇒吹田32号窯跡⇒一須賀２号窯跡、そして陶邑窯へ順次至るといったものである。したがって、陶邑窯の成立は最古ではなく、「須恵器の生産史上の第二段階」として位置付けられるとした[11]。

しかし、その後大きな展開があった。大庭寺遺跡の調査である。吹田32号窯跡をはるかに上回る内容の資料が出土し、膨大な同様式の資料を含むため、「吹田32号窯などの萌芽期の畿内須恵器生産資料に対比できる可能性を含んでいる」とした[12]。

さらに、詳細な説明はないが、北部九州から陶邑窯までの伝播経路として、中国・四国地方の諸窯跡を経由させる形を取り、そして東方へも同様な形で表わしている。もちろんこうした図式に載るものも存在するであろうが、ややその根拠と説得性に欠けるといえる。直接的に陶邑窯（大庭寺遺跡）へ来る可能性も否定できないのであり、詳細な検討が必要であろう。ただし、供給圏における陶邑窯の優位性や、その後の展開における陶邑窯の主導的な立場を説く点は重要である。また、初期須恵器の名称の定義の必要性についても、単に古相を示すのではなく、陶邑窯でのあり方を重視して設定する見解を示した点は評価される[13]。

木下亘氏も、陶質土器と初期須恵器について概観している。西日本の初期須恵器窯は、「それぞれ独自の特徴を有する土器を焼成していた」として多様性を説き、その系譜や、導入の背景、陶邑窯との関係等の検討の必要性を説いている[14]。

以上、初期須恵器窯の展開に関する論文を掲げたが、具体的な資料の比較や検討に欠ける面がある。初期須恵器窯が多数存在することは周知の事実であるが、前述したように、それらの

資料を横と縦の関係で比較することはあまりされていない。小稿では、こうした点を補いつつ、初期須恵器窯の展開について述べ、関係する諸問題を整理していきたい。

Ⅱ．各地の初期須恵器窯跡

日本における初期須恵器窯跡は現段階で16箇所を数える。その分布も北部九州から東北地方の広範囲に及んでいるが、分布の中心は西日本である。以下、各地域の窯跡を一括して概観する（あわせて表1・図1を参照のこと）。

東北地方　確実な初期須恵器窯として大蓮寺窯跡がある[15]。大蓮寺窯跡は、仙台平野の東北部の低丘陵上に立地し、1基の窯跡が調査されている。出土遺物は、甕・壺が主流である。全体的に、陶邑TK216型式などの古相を示すが、各土器は併せて鋭さを備えもつのが特徴であり、ON46段階に比定出来る。大蓮寺窯跡とは平野を隔てて少し距離をおき、金山窯跡が存在する。詳細な部分は不明であるが、大蓮寺窯跡に続く窯として位置づけられる[16]。

東海地方　確実には3ケ所の初期須恵器窯が確認できる。特に東山111号窯跡は[17]、多孔透しをもつ無蓋高杯や、鋭く屈曲する脚部をもつ器台など、特殊な形態をもつ点で注目されていた。陶邑窯におけるTK73型式並行の見解も出されていたが、筆者は蓋杯・甕の検討から、遡ってもTK216型式であり、大半がON46段階の特徴をもつ点を指摘した。やや特異な形態の土器を含む点から、周辺地域にその前段階の窯が存在することも予想されるが、現段階ではこの地方最古の窯といえる。

東山218-Ⅰ(48)号窯跡は、111号窯跡から直線距離にして1km未満の地点にあり、同一の群として捉えることが出来る。未調査のため、十分な検討資料とは言えないが、蓋杯・有蓋高杯の様相は、111号窯跡以上によりON46段階の特徴を備えている[18]。

城山2・3号窯跡は、発掘調査によって好資料を提出している。甕の口縁部形態は、比較的古相を残しているが、蓋杯は東山218-Ⅰ号窯跡よりも新相である。全体に定型化の方向を認め、ON46段階からTK208型式の範疇で解釈できる[19]。

近畿地方　近畿地方は言うまでもなく、泉北丘陵地に点在する陶邑窯の一群を中心にして、やや東方の一須賀2号窯跡、大阪平野の北縁である千里丘陵上の吹田32号・54号窯跡の3か所があげられる。

陶邑窯では、大庭寺遺跡が最古の段階に位置付けられる[20]。灰原の確認から、窯跡の存在が確実視されている。出土須恵器は圧倒的に甕が占めている。その他、器台に施された篦描き文・組紐文、甕の外面に凹線による螺旋文など、新しい技法が相次で確認された。最古段階の窯跡はこの大庭寺遺跡のみであるが、続くTK73型式・TK216型式になると、複数のかなりの数の窯が築かれ、生産が本格化する。

一須賀窯跡群は、4基の窯を検出しているが、2号窯が最古となり、3・4号窯は後の段階である。2号窯は甕・器台を中心にする遺物が少量あり、器台は篦描き文・コンパス文・組紐文など、多様である[21]。様式的には大庭寺遺跡と共通している。なお当窯跡の周辺部において、同様の窯跡が複数存在する可能性がもたれている。

吹田32号窯は、大阪平野を南に望む丘陵上に立地し、長方形の整然とした窯体をもつのが特徴である。一須賀2号窯跡、大庭寺遺跡と同じく、篦描き文を施した器台を有する[22]。吹田54号窯は、近年再確認された遺物であり、窯跡とすればTK73型式（新段階）並行期になり、継続して千里丘陵で須恵器生産が行われたことを示している[23]。

以上の3窯跡群は、規模の大小はあれ、いずれも最古段階の須恵器窯跡という点で共通しており、近畿地方における成立を考えるうえで重要である。

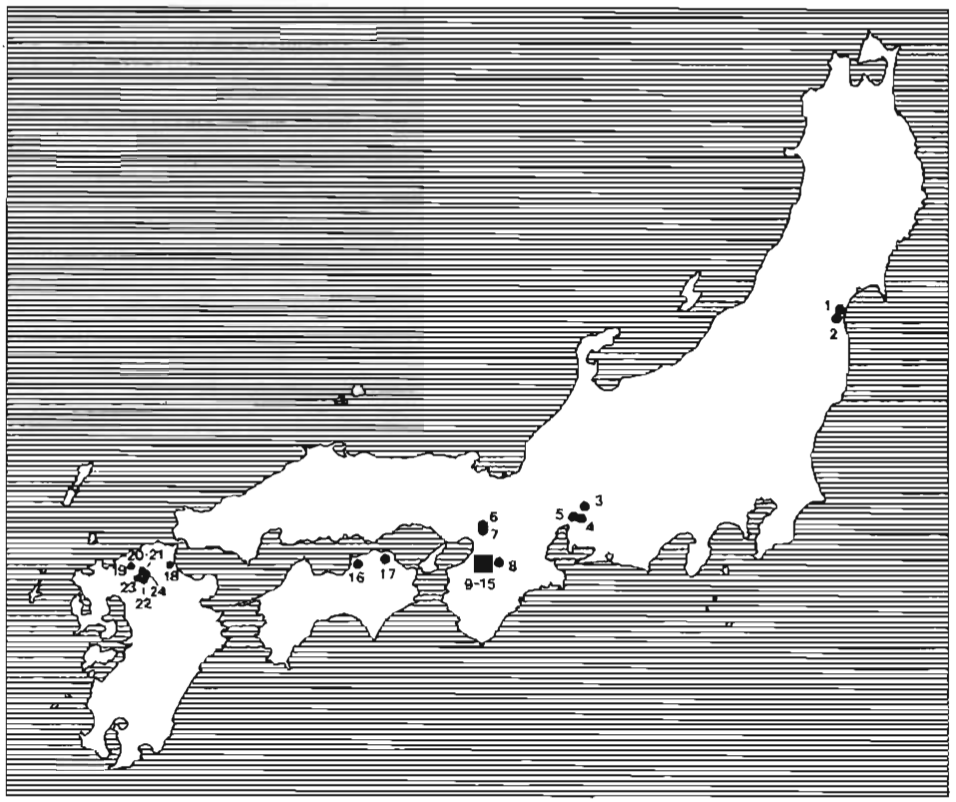


図１　初期須恵器窯の分布（番号は表１と対応）

四国地方　　香川県においては、三谷三郎池西岸窯跡と宮山窯跡の２か所の窯跡が確認されている。三谷三郎池西岸窯跡は、甕を主体とする少量の遺物が出土しており、TK73型式と対比できる。文様では、縦方向の櫛描文がある[24]。

宮山窯跡は、採集遺物ながら多種の形態をもっている。蓋杯・甕・器台・高杯・瓶などがある。定型化直前の鈍い手法を残しているのが特徴であり、ON46段階に所属するが、一方で古式段階に存在する格子叩き目文を残している[25]。三谷三郎池西岸窯跡とは地域を異にするため、両者を系統付けるには根拠に欠ける。

九州地方　　九州地方には、北部九州に６ケ所の窯跡群がある。朝倉地方に所在する山隈・小隈および八並の３窯跡が比較的近距離内に所在する他は、やや隔てている。

特に居屋敷窯跡は、他の窯跡とはかなり隔てて存在している。完全に水系・平野を違える点で、系譜・伝播を考える上で貴重である。現在整理中であるが、１基の窯跡が調査され、甕を主体とする遺物の中に、完形の瓶がある[26]。TK73型式並行期になろうか。

隈・西小田地区遺跡では、２地区に別れて窯跡が存在している。８地点では１基の窯があり、出土遺物には甕の他に壺・甑がある。10地点では４基の窯が確認・調査されている。この４基の窯は、甕の形態や蓋杯のありかた等により、同一の時期ではなく多少の時間幅をもって存在したと予想されるが、現在整理中であり今後の報告が期待される[27]。

小隈窯跡群と山隈窯跡群は、直接距離にして約１kmの近距離の位置にある。小隈窯跡群は２基の窯跡と散布地、山隈窯跡群は４基の窯跡を確認している。小隈窯跡は遺物の散布地が分散

表1　全国の初期須恵器窯跡一覧（●は確実性の高いもの。○はやや不確実なもの。番号は図1と対応）

地域	番号	窯跡（遺跡）名	所在地	壺 大型	壺 中小型	中小型壺	高杯 無蓋	高杯 有蓋	器台 高杯	器台 筒形	鍋	甕形鍋	甑	鉢	留千付鉢	留口壺	蓋	蓋 杯	土師系器種	その他	技法・文様の種類 叩き目文様	叩き目文様	叩き目文様	叩き目文様	叩き目文様	線刻文	時期 TK 73	時期 TK 73	時期 TK 216	時期 TK 208	時期 TK 208	時期 ON 46	地域産生産	備考
																					砥部絞り	組紐文	鬼板文	縄目	格子	平行		鈎手					
東北	1	大蓮寺窯跡	宮城県仙台市宮城野区東仙台		●	●	●		●		●				●											●	○				●			
	2	金山窯跡	宮城県仙台市西多賀		●				●			●														●	○					●		
東海	3	城山2・3号窯跡	愛知県尾張旭市城山町	●	●	●	●	●					●	○	●		●	●		紡錘車						●						●	●	
	4	東山111号窯跡	愛知県名古屋市昭和区伊町	●	●		●	●	●				○	○	●		●	●								●	●				●		●	
	5	東山218-1号窯跡	愛知県名古屋市千種区稲舟通	●	●	●	●	●	●						○		●	●								●	●				●		●	
近畿	6	吹田54号窯跡	大阪府吹田市								●		○			●		●		滑型壺									●					
	7	吹田32号窯跡	大阪府吹田市朝日が丘町	●	●	○			●				○						●				●			●		●						
	8	一須賀２号窯跡	大阪府南河内郡河南町東山	●	●	●	○	○	●					●								●	●		●	●		●						
	9	大庭寺遺跡	大阪府堺市大庭寺・小代	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●		●	岩	●	●	●	●	●	●	●	●						
	10	陶邑TK73号窯跡	大阪府堺市和田	●	●	●	●		●		●	●	●	●	●		●	●	●						○	●		●						
	11	陶邑TK85号窯跡	大阪府堺市和田	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	●					●	●	●		●						
	12	陶邑TK87号窯跡	大阪府堺市和田	●	●	●	●		●		●	●					○	●		滑型壺・耳杯				○	●	●		●						
	13	陶邑TK216号窯跡	大阪府堺市高蔵寺	●	●	●	●	●	●	○	●	○	○		○	○	●	●								●			●					
	14	陶邑ON46号窯跡	大阪府堺市美木多	●	●	●	●	●	●	○	●	○	○		●	○	●	●								●					●			
	15	陶邑TK208号窯跡	大阪府堺市高蔵寺	●	●	●	●	●	●	○	●	●	○		○	○	●	●								●						●		
四国	16	宮山窯跡	香川県三豊郡豊中町比地大		●	●	●		●	●	●					●	●	●		紡錘車					●	●					●		○	
	17	三谷三郎池西岸窯跡	香川県高松市南新	●	●	●	●	●													●				?	●		●						櫛描直線文あり
九州	18	居屋敷窯跡	福岡県京都郡豊津町居屋敷	●							●															●		●						
	19	新開窯跡	福岡県福岡市西区今宿町新開				○	○	○		○						○	○													○			未確認資料。
	20	隈・西小田窯跡群No 8	福岡県筑紫野市大字隈	●	●	●					○		●						●							●			●						
	21	隈・西小田窯跡群No10	福岡県筑紫野市大字隈	●					○		●		●				●	●								●			●	?	○			
	22	小隈窯跡	福岡県朝倉郡夜須町下高場	●	●	●	●	●	●		○		●	○	○		●						●	○		○	●	●		?	○			
	23	山隈窯跡	福岡県朝倉郡三輪町山隈	●	●	●	●	○	●		●	●	●		●		●			紡錘車					○	●		●					●	
	24	八並窯跡	福岡県朝倉郡夜須町三並	●	●	●	●		●				●		●								●			●		●						

し、定型化以後の須恵器も採集している点から、継続する窯業遺跡と判断されよう[28]。

山隈窯跡は、最古段階の須恵器とともに、埴輪・ミニュチュア土製品が同時に出土した[29]。初期の須恵器生産の受容のあり方と、内容の検討を行う上で貴重である。当窯は、小隈窯跡と同時期ないしは前後して生産が開始したことは確実であり、小隈・八並窯跡でもミニュチュア土製品が採集されている点など、両者の関係は特に緊密で、留意する必要がある。

小隈・山隈窯跡群の北約5㎞の地点に八並窯跡がある。3基の窯が確認されており、篦描文をもつ須恵器も採集されている[30]。

新開窯跡の詳細については必ずしも明らかではない。従来、TK23型式並行期の操業開始とみられていたが、小田富士雄氏は初期須恵器の段階まで遡る可能性があると改めた[31]。確かに掲載された蓋杯・器台・高杯脚部の端部の特徴は、ON46号窯の須恵器と同じ特徴をもっており、未確認ながら、この段階まで遡る可能性をもたせておきたい。

以上が、現在までに確認出来た初期須恵器窯の概要である。これらを整理して、出土須恵器の種類・文様・技法、および所属時期を一覧表にしたのが表1である。器種組成には、各窯跡でかなりのばらつきがあるが、これは本来の様相ではなく、窯跡の検出状況や調査の制約などに起因する場合が大きい。良好な資料を提出する窯跡を基準とする必要があろう。また、陶邑窯における窯跡の数はこの限りではなく、当表はその一部を代表例としてあげている。

Ⅲ．初期須恵器生産の展開

1)．時代別概観

表1をもとにして、初期須恵器生産の展開を段階別に見ていこう。各段階の捉え方は、大庭寺遺跡の段階（表1では、TK73型式の前半としている。一型式として大庭寺遺跡の一群を設定するか否かは本稿では議論しないが、重要な課題であろう)、TK73型式、TK216型式、ON46段階、TK208型式に区別して時期を示し、把握していきたい。

この中で、大庭寺遺跡を最古にする点については検証の必要があるが、その根拠となるのは以下の点である。器種組成における蓋杯の欠如と高杯の優位性。篦描き文様・螺旋文・組紐文の存在。器形の多様性。甕主流の生産などである。しかし、TK73型式との前後関係が明確に確認された訳ではない。上に掲げた根拠以外に、消費地における状況などの裏付けが必要であるが、これまでの型式学的方法による編年研究の成果を基礎にすれば、この序列は有効であり、筆者も同じ考え方に立つものである。

〈大庭寺遺跡（TK73型式前半）期〉　大庭寺遺跡の段階、すなわち日本における須恵器生産の開始は、陶邑窯・吹田32号窯・一須賀2号窯の近畿地方と、北部九州・朝倉の小隈・山隈・八並窯跡に限られている。九州地方の3窯は、実年代でかなりの議論があるが、筆者は大庭寺遺跡とさほど時間差は存在しないと考えている。

最古の窯がこの両地域にあることは重要である。北部九州は言うまでもなく、朝鮮半島からの玄関口に当たる。大陸・半島からの物・人の流入と通過は活発である。そうした地域に、窯業としての生産がいちはやく定着することは、物理的な条件が大きいと解釈されるが、一方で生産を支え維持する勢力の表現としての理解もできよう。

地理的要因とは別に、こうした生産工人集団は東をめざし、大阪湾に直進している。そして生産を開始した。この事実は、北部九州のあり方とは基本的に異なる。瀬戸内海の東端を目的地として目指したのであり、不目的な漂流の結果ではない。恐らく、中央政権ないしは関連する中央豪族と深く関係していたことは、先学の説くところであり、そのあり方は、陶邑窯にお

ける後の展開に大きく表れてくる。

初期におけるこれら大阪平野の3窯の解釈は、(1). 漂着等による偶発的な開窯。(2). 各地の豪族統括のもとでの開窯。(3). 中央政権管理下での開始。(4). 須恵器生産適合地模索のための試験的開窯。などの多くの仮説が成り立つ。筆者は(3)・(4)の解釈を重視したいが、初期においては(2)の要素も大きく関係するであろう。特に地方における窯は、大きくかかわってくる。藤原氏は、こうした3窯を「初現期の窯」として位置付け、本格的な生産盛期とは異なる視点を要するとして、(1)〜(4)の不安定な様相を配慮している[32]。

これらの判断は、各窯の系譜にも大いに関係する。3窯の須恵器は、少しずつ様相を違えるが、器種構成・文様構成・技法の点で共通する部分もあり、系譜的に大幅な違いはないと考えている[33]。したがって初期においては、(4)の須恵器生産適合地模索のための試験的開窯も重視すべき点であり、その背後に中央政権と各豪族層の存在を考える必要があろう。

大阪平野での生産は、結果的には陶邑窯の本格化と優位性に到達するが、吹田32号窯に継続する諸窯の存在が明らかになりつつ千里丘陵では、小規模ながら生産が存続していたようである。実態は不明な部分が多いが、一須賀2号窯跡でも近接する窯跡と遺物のあり方から、こうした可能性も示されている。陶邑窯の中心的存在を重視しながらも、周辺の小規模生産を許容している点は、参政する中央豪族や、周辺豪族への配慮であろう。

〈TK73型式期〉　TK73型式の段階になると、陶邑窯内では、TK73号窯・濁り池窯・上代窯・TK85号窯・TK87号窯・他のかなりの窯が成立する。もちろんこの中には多少の前後関係は見られるが、前段階に比較して量産方向をたどることは間違いない。

各地の窯は、当段階ではさほど多くない。相変わらず北部九州は優勢であり、居屋敷窯跡、隈・西小田窯跡群ではこの前後に生産を開始する。両窯跡については、朝倉地方の窯と同時期とする見解もあるが、居屋敷窯跡における須恵器の形態は新しい傾向かもしれない。同様に隈・西小田窯跡群についても考えられることであるが、さほど大きな開きはない。両者とも、成果の報告が期待される。

大庭寺遺跡期を含めて、この九州地域での生産の開始と継続は、大阪平野に次ぐ。地理的な条件が大きいとはいえ、対外交渉に直接・間接的に深く関係する集団が想起できる。

同様の窯は少し隔てて、香川県三谷三郎池西岸窯跡にある。当窯も当該期と判断するが、大庭寺遺跡期と同時期とする見解もある。確かに、大甕の底部に絞り技法を採用する点や、縦方向の櫛描文をもつ点は大庭寺遺跡と共通しており、遡る可能性をもつが、大庭寺遺跡期よりは古くならない。窯成立のルートとして、北部九州→三谷三郎池西岸窯→吹田32号窯→陶邑窯・一須賀2号窯と藤原氏は描くが[34]、筆者は前述したように、第1に朝鮮半島→陶邑窯の太いルートを前提として考えたい。その過程で三谷三郎池西岸窯・吹田32号窯・一須賀2号窯への同時到着、または折り返しを想定する。もちろん漂着等による偶発的な開窯も否定できないが、各港々にそうした偶然は不自然である。

TK73型式期の窯は、陶邑窯では増大しているが、上記の居屋敷窯跡、隈・西小田窯跡群・三谷三郎池西岸窯跡が、仮に大庭寺遺跡期に属した場合、当該期は陶邑窯と吹田54号窯跡に限られることになり、初期須恵器窯の展開を考える上で、特異な時期になろう。この点は次のTK216型式期にも共通する。

〈TK216型式期〉　陶邑窯内ではますます増大する。正確な数は掲示できないが、数倍近くに増えていく。千里丘陵の吹田54号窯跡に続く窯は不明であるが、継続する可能性もある。それに反して、この段階の地方窯は少ない。九州で開始した朝倉の一群と隈・西小田窯跡群の一部が継続していると考えられるが、明確な根拠に欠ける。また、その他の地域では現段階で

は不明である。

したがってこの段階は、窯が新設された地域はなく、前段階の操業が継続して行われる地域がほとんどといえる。今後の状況で変更の可能性はあるが、地方におけるこうした状況は支配的と考えたい。

ただし、次段階で述べる東山111号窯は、主体をON46段階におく、陶邑窯の影響を認める窯跡であるが、器台・甕・高杯などにおける特殊性は、ストレートのON46段階、すなわちすべてが陶邑窯の系譜とは言い難いのであり、前段階ないしはそれ以前に、多少系譜を違えた須恵器が生産されていたことも予想される。岩崎直也氏が「尾張型」と称した概念[35]とは違うが、少なからず前段階の窯の存在を推測する点では共通する。

〈ON46段階期〉　陶邑窯内での増大の方向は変りない。千里丘陵のこの期の状況は不明である。地方窯においては前段階に比べ、かなりの数の窯が新設されている。東北地方では大蓮寺窯跡がいちはやく成立し、やや遅れて同地域内の金山窯跡が成立する。大蓮寺窯の成立については、以前に考察したように、陶邑窯の影響が強いと考えられる。

東海地方では、東山111号窯についで、東山218-Ⅰ号窯、そして城山2・3号窯が連続して成立する。東山111号窯の成立については、上で述べたように、前段階での生産が予想できる。しかしこの段階になると、蓋杯や甕、高杯の一部は、陶邑窯の影響を強く受けていることが看取されるのである。東山218-Ⅰ号窯についても同様なことが言えるが、こちらは111号窯の製品に比べて、陶邑窯の色彩が強い。続く城山2・3号窯は、やや遅れてTK208型式の段階に入る可能性が強い。蓋杯・高杯・甕・壺などは、ON46段階の特徴を残しながらも全体的に定型化の様相を認める。

四国地方では、香川県宮山窯跡がある。出土遺物には、上半が柱状で下半が「ハ」の字形に開き、円孔を配す高杯脚部や、形態不明な、やや特殊なものを少量含んでいるが、蓋杯・高杯・甕・壺などの形態や技法はON46段階の特徴と一致しており、陶邑窯の影響として考えられるのである（図2）。この地域には、東方に約40km隔てて、大庭寺遺跡期からTK73型式期にかけての三谷三郎池西岸窯跡が存在している。特異な高杯の存在は、宮山窯跡を含めたこの地域に同様の窯が存在する可能性を示唆している。

北部九州では、新たに新開窯跡が候補として上げられる。当窯は、詳細が明らかでないので断定できないが、整ったON46段階の特徴をもつ（図2）。大庭寺遺跡期より継続、あるいは断続している隈・西小田窯跡群では、この期の段階で蓋杯を認める。同様に継続・断続する朝倉の窯跡群においては、採集資料のために断定は出来ないが、小隈窯跡ではかなり後半代まで操業されている様であり、当期も存在している可能性が強い。

2）．須恵器生産の展開

以上述べてきた、各段階の窯の消長を再整理したものが表2である。集合する窯跡は群としてまとめている。表中における斜線「▨」は、初出期における朝鮮半島の形態・意匠を残し、系譜をたどれるものを想定し、網目「▦」は、日本で生産が開始して以降、彼地のものが変化したもの、すなわち日本化したものを指す。表2における、陶邑窯の部分はTK73型式以降がすべて「▦」印となる。これは、TK73号窯の一群も日本化したものとの解釈に立つ。したがって、この段階以降は、殆どのものが日本化しているといえる。

筆者はかつて、初期須恵器窯の成立について、突発型と波及型とに分けたことがある[36]。その成果と表2をもとにして、再整理すると、各初期須恵器窯の成立と展開は、大きく3つの型に分けられる。基本的には、Ⅰ型とするものは、各窯と同系譜、異系譜を問わず、系譜を直

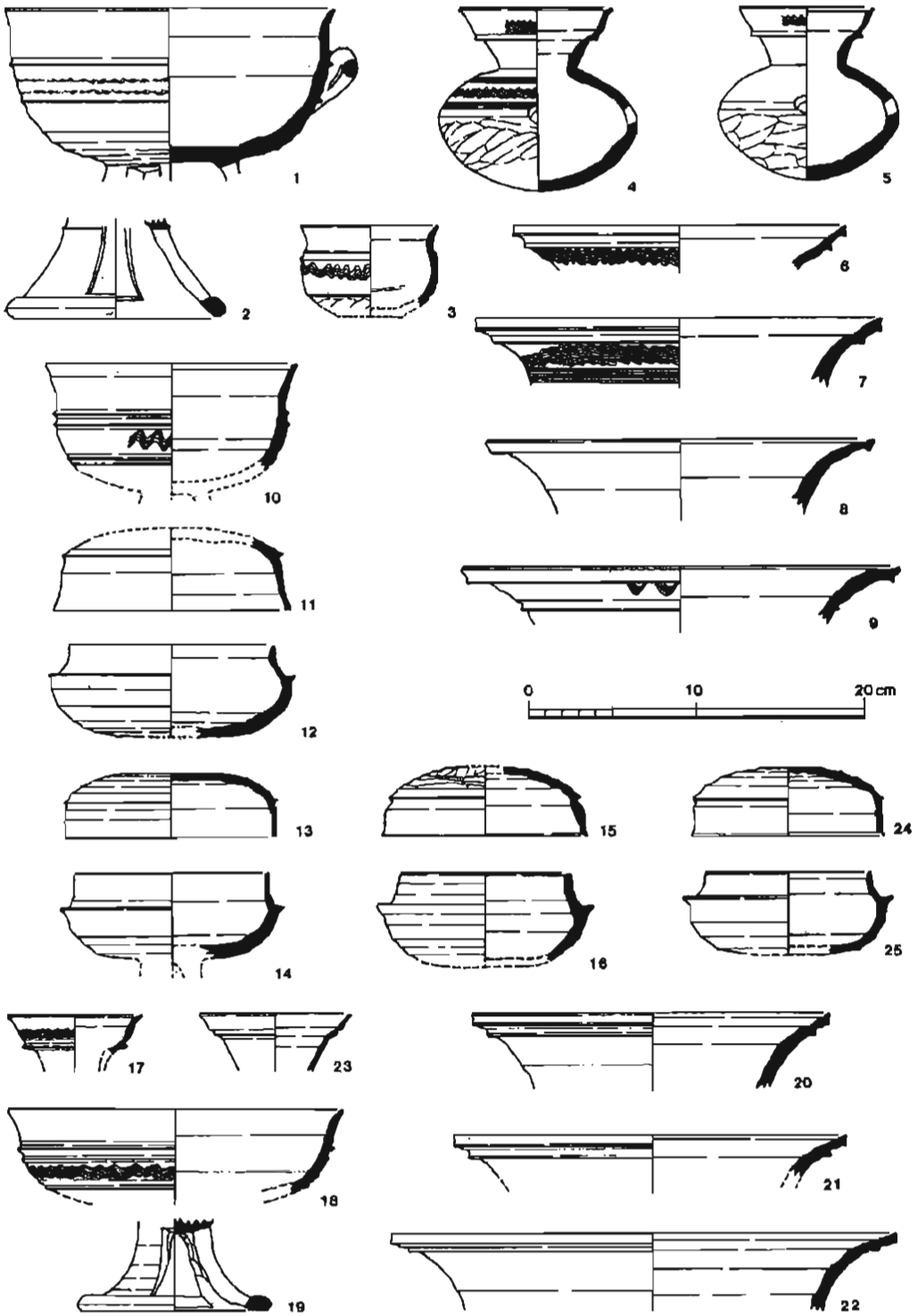
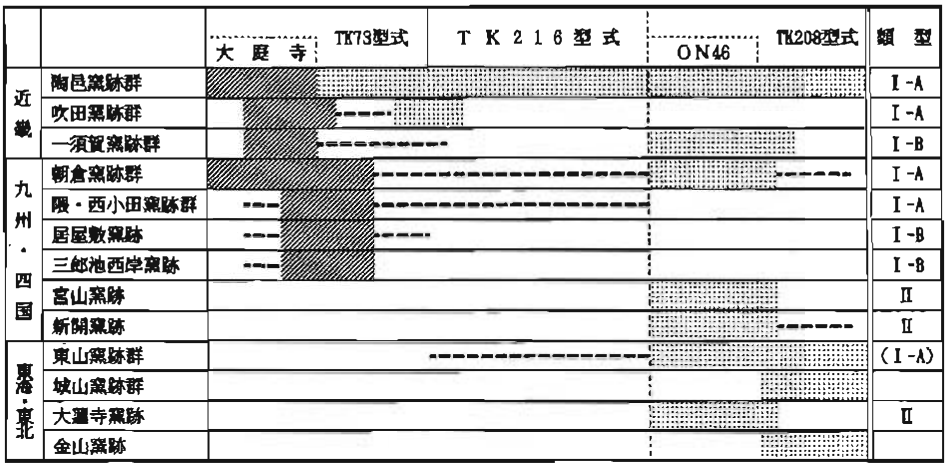


図2　各窯跡出土須恵器（1～7大蓮寺窯、8～12東山111号窯跡、13・14東山218-1号窯跡、15～22宮山窯跡、23～25新開窯跡。各注10・15・17・18・25より。一部修正。）

表2　初期須恵器窯の消長（▨は渡来型▤は日本・陶邑型）



接的に朝鮮半島に求めることの出来るものであり、前稿の突発型になる。Ⅱ型とするのは、国内で一旦定着したものが、他に影響を与え、場所を変えて新しく開窯するものであり、波及型をいう。以下その類型を記述する。

Ⅰ-A型　直接的に朝鮮半島に系譜が求められ、日本で開窯後も後代まで継続して生産が行われるもの。

この型は、陶邑窯を代表として、やや不明な部分があるが、吹田窯跡群、小隈窯跡を主流にする朝倉窯跡群があり、隈・西小田窯跡群も可能性をもち、東山窯跡群も前述した様にその可能性がある。

Ⅰ-B型　直接的に朝鮮半島に系譜が求められる点はⅠ－A型と同じであるが、継続性がなく、あるいは現段階で確認できず、短期間のうちに消滅するもの。

この型としては、三谷三郎池西岸窯跡、居屋敷窯跡があり、一須賀窯跡群もこの中に含まれよう。

Ⅱ　型　直接その系譜を朝鮮半島に求めることは出来ず、国内からの影響・波及によって成立したものである。その影響はほとんどの場合、器種組成や技法面から見て、陶邑窯が有力である（図2）。

この型としては、宮山窯跡・新開窯跡・大蓮寺窯跡があり、城山・金山窯跡もこの可能性をもつが、すでに存在している在地窯の影響も一部で考えられるため、二次候補とする。

以上の3類型の中で、Ⅱ型における継続・断続性を加味すれば、更に細かく分類が可能である。これは、在地における展開の様相や、次章で説く地方窯の第2の拡散とも合わせて組み立てる必要があり、今後に期したい。

日本における須恵器生産の開始は、朝鮮半島からの人と技術の導入による。この朝鮮半島からの直接移入（Ⅰ型）は、表2でも明らかな様に初期の段階に限定され、近畿・北部九州・四国地方を中心に生産が開始する。開始の経緯については明確な根拠を示せない。しかし、他地方に劣らず、いち早く近畿地方に到来して生産を開始している点、およびこの地域が後代にわたって中心的な位置を占める点を評価する必要があろう。すなわち、多くの研究者が指摘する様に、中央政権や中央豪族と無関係の上に成立したのではなく、こうした権力の要請に答える

形で生産が開始され、その管理も行われたのであろう。

北部九州と近畿地方の須恵器の系譜は多少異なる。北部九州と近畿地方を目指した集団が、基本的に異なっていたことを示している。四国および窯跡の予想される和歌山県は、航海ルートとその職掌と関係している。

後代まで継続するＩ－Ａ型は、早目に朝鮮半島様式から脱却して陶邑型（陶邑様式）になると考えられる。この点は、吹田窯跡群では明らかであるが、他の地域では空白である。TK216型式前後の間が不明である。朝鮮半島様式を根強く保ちながら継続するのか、あるいは近畿地方（陶邑窯）の強い影響を受けて変化すか。解明が望まれるのである。

Ⅱ型の特徴は明確である。いずれもほぼON46段階に成立し、陶邑窯の影響を強く受けている。系譜については、非陶邑窯の見解もあるが、前出の拙文で示した様に、明らかに日本化した陶邑窯との共通性を認め（図２）、陶邑窯の影響下での成立と生産の維持が考えられるのである。しいては、その背景にある中央政権や中央豪族と無関係ではなく、こうした権力機構の一環に沿って成立した可能性が大きい。それは、東北・東海・四国・北部九州の幅広い地域におよび、汎日本的な、統一された現象といえる。

さらに重要なことは、先程述べた中間時期のやや不明なＩ－Ａ型とした、北部九州の各窯跡群においても、ON46段階には確実に陶邑型（陶邑様式）に移行し、斉一化が行われていることである。これまでの伝統を放棄し、迅速に転化する現象は、流行を真似るといったような一過性のものではなく、強い圧力が存在していた結果として理解出来よう。前段階の様相が不明な東山窯跡群も、同様な現象として把握できる。この点は橋口達也氏も指摘している[37]。

したがって、初期須恵器窯の成立には、今日までの成果による限り、大きく２つの波が存在すると考えている。第１段階は、初出期における導入期の波であり、彼地より渡来した陶工によって、九州・近畿のみならず、四国においても生産が行われた時期（Ｉ型が相当する）。第２の波はON46段階であり、陶邑型の窯が各地に多数成立する時期である（Ⅱ型が相当する）。

Ⅳ．初期須恵器窯と地方窯の拡散

初期須恵器段階における、各窯の成立と展開は上記した通りである。Ⅱ型の窯、すなわち第２段階（ON46段階）の窯は、完全に日本化し陶邑化したものが、各地に成立するのであった。それは偶発的な１・２基の単位ではなく、図１、表１・２で明らかなように、汎日本的存在し、分布するのである。

かつて、日本における地方窯の拡散は、TK23型式頃とするのが定説であった[38]。しかし、その後徐々に初期須恵器段階の窯跡が検出されていったことは、「多元論」との関係で述べたところである。こうした現状において田辺氏は、地方窯の成立時期をON46段階に遡らせて、この時期は「かなり斉一的であり、そこに須恵器生産の地方拡散が、すぐれて政治的背景をもっていた」とした[39]。まさに上記における第２の波の段階と符合する。したがって、筆者もこの段階をもって、地方窯の第１の拡散期と考えたい。

確認している窯跡は表の通りであるが、この段階の拡散はさらに増加していくと考えられる。例えば、筆者を含めて多くの研究者が指摘しているように、地方出土の須恵器のあり方から、愛媛県・岡山県・島根県や兵庫県、さらに三重県および関東地方でも、この段階の窯が検出される可能性がある。ただし、和歌山県においてはＩ型の可能性が強い。

ON46段階は言うまでもなく、定型化直前の段階である。須恵器製作の技術的側面では、これまでの製品と鋭さの面で画するため、轆轤の整備といったかなり重要な局面として捉えることが可能であるが、地方窯拡散の面での積極的な根拠はやや求めにくい。定型化直前における、

技術的安定の見通しが、製品生産の安定をもたらした可能性を指摘するに留めておこう。

やはり、拡散の背景は田辺氏が説くように、政治的な機構の中で解釈されよう。大蓮寺窯跡を例にすると、当地は雷神山古墳や遠見塚古墳に代表されるように、大型の畿内型前方後円墳をもつ地域であり、近畿との関係が強く感じられる。大蓮寺窯跡もこうした状況下あって、招来あるいは賜物として成立するのであろうか。そして、その一環には単に物とか工人だけでなく、中央からの役人の配置も予想されるところである。

かつて、筆者は地方窯の成立に関して、埴輪を同時に焼成する窯の存在と、古墳における無黒斑埴輪に注目し、地方窯の成立が古墳の築造と大きく関係して成立し、そこには築造と祭祀を担い、同時に窯業（須恵器・埴輪）にも明るい集団、「葬送儀礼集団」を想定したことがある[40]。そしてその派遣こそが、畿内政権との政治的諸関係の中で行われるとした。その実態については、検証を重ねる必要性があるが、一つの仮説として示しておきたい。

地方におけるON46段階の特色は、量的な裏付けは今後の課題であるが、上記の古墳祭祀主体の形態から、須恵器が集落・住居空間へ多用され、出土の割合が増えてくることである。生産の動向と一致する。

ON46段階が地方窯の第1の拡散であれば、従来のTK23型式頃の拡散は、第2の拡散になる。この段階の生産については、小稿の目的を越えているので詳細には述べないが、旧来から知られている久居窯・鬼神谷窯・高畑窯・大井窯・松ノ山窯等に加えて、近年、多くの窯跡が検出されている。この中には、東山11号窯のように、初期の段階から継続するものや、新たに出現するものなど、その成立の要因は一様ではない。

以上の拡散段階と、初期須恵器窯の展開を合わせると、図3のようになる。それぞれの地域によって多少の違いはあるが、おおむねの状況は把握できよう。近畿地方が途中から消滅するが、ここでは陶邑窯に含めて考えていただきたい。

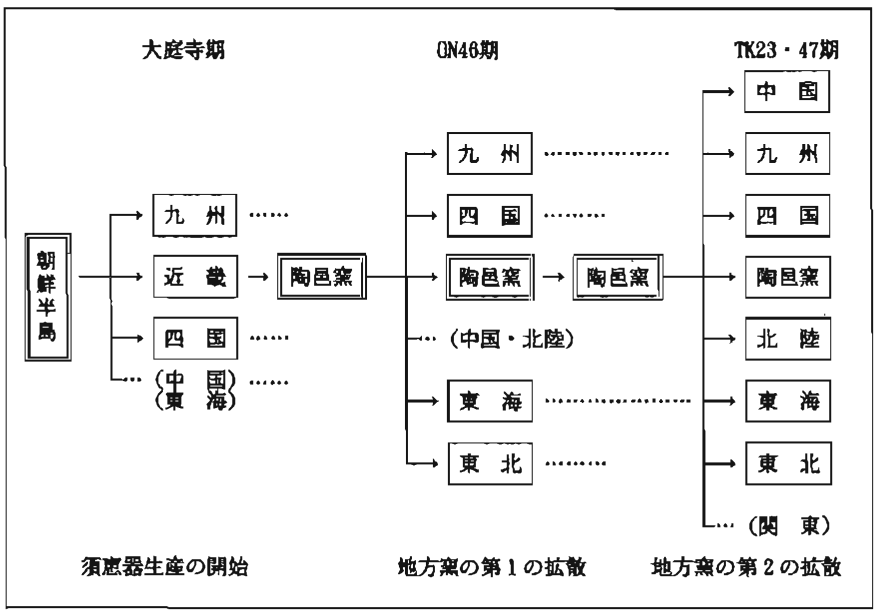


図3　須恵器生産の開始と地方窯の拡散

おわりに

小稿では、日本における初期須恵器生産の開始と展開について、各窯跡の内容を比較しながら検討してきた。その成果は表2・図3に示したように、初出期の生産に限って直接的に朝鮮半島に由来し、九州・近畿および四国で生産が開始し、その後まもなく陶邑窯の主導型に変わり、ON46段階に地方窯の第1の拡散が行われ、続いてTK23型式の頃には第2の拡散が行われた。いずれも初出期を除けば、陶邑型（陶邑様式）の波及であり、そこには承知のように、政治的な背景を認めたのである。

このように整理すると、冒頭で触れた「多元論」は、初出期における多要素という部分に集約でき、雑然とした状況から脱却して明快な解答がえられよう。改めてここでは論議しないが、日本化が芽生えるTK73型式以降は、「一元的」と限定はできないものの、陶邑窯の優位性と主導性は歴然とした事実として再認識することができるのである。

地方窯の第1の拡散であるON46段階は、須恵器の製作技術においても重要な局面であるが、加えて汎日本的なレベルでの、斉一的な波及・拡散は、政治史においても重要なポイントになる可能性を示唆しておきたい。小稿では、こうした要素を総括する用意はないが、第2の拡散を雄略朝末期の政策として位置付ける見解があるように、ON46段階においても、同様の意義を考えたい。将来的に、鉄器生産等の他の手工業生産における状況や、遺跡・遺物の状況を総合的に検討し、解明していきたいと考えている。

注

1）広大な地域を対象とした陶邑古窯址群の調査結果により、全体的な見通しと組立が可能になった。田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年。

2）森　浩一「和泉河内窯の須恵器編年」（『世界陶磁全集』1　河出書房新社）1958年。

3）横山浩一「手工業生産の発展－土師器と須恵器」（『世界考古学大系』3　平凡社）1959年。

4）田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966年。

5）田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工芸』390 1971年。同「須恵器生産の開始と展開」『日本美術工芸』391 1971年。

6）注5と同じ。

7）植野浩三「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第6集　1988年。同「初期須恵器窯の系譜について－大蓮寺窯跡を中心にして－」『文化財学報』第9集　1991年。

8）植野浩三「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第6集　1988年。

9）橋口達也「須恵器」『日本考古学協会1990年度大会　研究発表要旨』1990年。

10）小田富士雄「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編－西日本初期須恵器の成立をめぐって－」『古文化談叢』第24集　1991年。

11）藤原　学「須恵器の窯跡群－近畿」『季刊考古学』第24号　1988年。

12）藤原　学「須恵器の編年－近畿」（『古墳時代の研究』6　土師器と須恵器　雄山閣）1991年。

13）藤原　学「須恵器生産の展開」（『新版古代の日本』5　近畿Ⅰ　角川書店）1992年。

14）木下　亘「陶質土器とその分布」（『古墳時代の研究』6　土師器と須恵器　雄山閣）1991年。

15）渡邊泰伸ほか「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」（『陸奥国官窯跡群Ⅱ　古窯跡研究報告』第4冊　古窯跡研究会）1976年。

16）斎藤秀寿「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」（『陸奥国官窯跡群』Ⅳ　古窯跡研究報告』第6冊　古窯跡研究会）1981年。

17）斎藤孝正「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部論集』LXXXIV　史学29　1983年。
18）荒木　実ほか「東山218号窯の古式須恵器について」『古代人』第33号　1978年。
19）七原恵史ほか「城山古窯址」（『尾張旭市の古窯』尾張旭市教育委員会）1978年。
20）大庭寺遺跡は現在も調査中であるが、その一部が公刊されている。冨加見泰彦ほか『陶邑・大庭寺遺跡』『同』Ⅱ　（財）大阪府埋蔵文化財協会　1989・1990年。奥　和之「速報　大庭寺遺跡の初期須恵器窯」『韓式系土器研究』Ⅲ　1991年。
21）大阪府教育委員会『河南町東山所在遺跡発掘調査概報』1969年。
22）藤原　学『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』昭和60年度　吹田市教育委員会　1986年。
23）藤原　学　前掲注13）に所載。
24）香川県教育委員会「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度　1984年。
25）松本敏三「讃岐出土の須恵器　宮山窯跡の須恵器」『瀬戸内歴史民俗資料館年報』7　1982年。
26）福岡県教育委員会によって1988年に調査された。現在整理中である。同遺物は、副島邦弘氏のご好意で拝見させていただいた。記して謝意を申し上げます。
27）渡邊和子「九州地域(1)ー隈・西小田地区遺跡群の窯跡」（『陶質土器の国際交流』柏書房）1989年。現在整理中であるが、遺物は渡邊和子・草場啓一氏のご好意で拝見させていただいた。記して謝意を申し上げます。なお、遺物の一部は小田富士雄　前掲注10）に掲載されている。
28）平田定幸「朝倉の初期須恵器窯跡」『甘木市史資料』考古編　1984年。他。
29）九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査－福岡県朝倉郡三輪町所在の初期須恵器窯跡群－」『九州考古学』第65号　1990年。
30）平田定幸　前掲注28)。
31）小田富士雄　前掲注10)。
32）藤原　学　前掲注13)。
33）植野浩三「陶邑・大庭寺遺跡と吹田32号窯跡」『韓式系土器研究』Ⅲ　1991年。
34）藤原　学　前掲注13)。
35）岩崎直也「尾張型須恵器の生産」『信濃』第39巻４号　1987年。
36）植野浩三　前掲注８)。
37）橋口達也　前掲注９)。
38）田辺昭三　前掲注５)。
39）田辺昭三「初期須恵器について」（『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　平凡社）1982年。
40）植野浩三「西日本の初期須恵器－三ツ城古墳の須恵器を中心にして－」『奈良大学紀要』第９号　1980年。

Summary

This paper is to investigate the commentand the development of Sue—ware's Producution in Japan. It's development is as follows. The Sue—ware's production of the initial phase, directly originated in Korean Peninsula, was confined to Kinki, Kyushu and Sikoku districts. As it became the second phase (ON46 kiln type period), step kilns of Suemura type were built in many districts all at once beyond the intial areas. This is first expansion of local productions of Sue ware.

The third phase is the TK23 and TK47 kiln type period, and the phase of the second influence of Suemura kiln type. So, this is the second expansion of local productions of Sue ware. I recognize that these expansions were owing to the strong influence of Suemura ceramic industry and behind them there must be political movemennts.